

巻頭言「キャリア教育」再考 学士課程教育機構 機構長 寺西宏友……1
[共通科目] 共通科目ラーニング・アウトカムズの現状と今後の展開……2
[GCP] グローバル・シティズンシップ・プログラムと学生の能力向上評価……3
[CETL] 2011年度後期 CETL学習支援の状況、他……4
調査報告：教育の質向上に関する教員アンケート……5
GP最終年度・取組み報告……6
2012年度前期 CETLの活動……7
[WLC] FD活動・2012年度前期の活動……8
エッセイ・コンテスト、FDワークショップ報告……9
第9回FDフォーラム報告・お知らせ……10

「キャリア教育」再考

学士課程教育機構 機構長 寺西宏友

現 在日本の教育界においては、就職活動を通じて職業生活に直結する大学での「キャリア教育」は当然のこととして、小学校・中学校・高校の各段階においても「キャリア教育」の重要性が叫ばれるようになってきている。学校教育の中で「キャリア教育」が提唱されるようになったのは、1999年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであった。そこでの「キャリア教育」の定義は、「望ましい職業観・勤労観および職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」とされている。

こうした「キャリア教育」の必要性が言われるようになる直前の1996年度に、文部省と労働省(いずれも当時)が、「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」を開始した。バブル崩壊後の長期景気停滞に由来する「就職氷河期」の実態を把握するためであった。以来続けられてきた同調査によれば、2011年3月卒業時の内定率(就職希望者に占める内定者割合)は、過去最低の91.0%であった。これは、リーマンショックを引き金にした世界金融恐慌とその日本経済への影響の結果である。しかし、大学生の就職難は、決して景気の動向だけではなく、若年雇用者数自体の減少が大きな要因をなしている。すなわち、歴史上最大であった1992年の750万人から、2010年の465万人へという激減が背景にある(総務省の「労働力調査」)。若年雇用者数の減少が進んだ時期に、18歳人口は、1992年の205万人から2010年の122万人に減少している。その一方で、大学進学率が26%から51%へ増加し、4年生大学への進学者数は54万人から62万人に増えているのである。それに加えて、小泉・竹中改革以降の就業形態の大きな変化の影響も大きい。正社員が絞り込まれ、パート、契約、嘱託、派遣等の非正規雇用への置き換えが進んだ。2010年10月1日時点で、厚労省が民間事業所を対象に調査した「就業形態の多様化に関する総合実態調査」によれば、全年齢の男女の総計で見ると、雇用労働人口全体に占める非正社員比率は、38.4%であるが、年齢層別に見てみると、15~19歳では、男性91.6%、女性95.8%、20~24歳では、男性46.7%、女性44.2%となっている。すなわち高校新卒者は、大多数が非正社員で、短大・大学新卒者を含む年齢層は、男女とも45%前後という驚くべき事実が浮かび上がる。

こ うした客観的な状況を見ただけでも、いかに大学新卒者の就職が、大変なことかが分かる。そして、学生個々にとってみれば、採用者数の減少と厳選採用による就職活動の長期化が、重い負担としてのしかかっているのである。就活によるうつ病、さらには就活自殺に追い込まれるケースもあると言われている。ここまで大変な就活を勝ち抜いた、新入社員の意識や態度にも変化がみられるという。日本生産性本部の2011年度「働くことの意識調査」によると、「デー

トの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」との問いに、「デートをやめて仕事をする」が過去最高の87.0%を占め、「残業をことわってデートをする」は12.5%に過ぎなかった。この数字は、就職が困難になるほど、会社に従順になること、あるいは会社にしがみつきおもねる傾向を示しているのではないだろうか。これは、一面、企業にとっては好ましいことであるかもしれないが、長期的・大局的に見ると、本当に歓迎されるべきことかどうか?企業の発展に欠かすことの出来ないイノベーションの源泉となる、労働者の主体性・独創性やチャレンジ精神を枯渇させることになるのではないだろうか?

こ まで考えてみると、大学が「キャリア教育」という名のもとに、学生にほどこすべき教育とは一体なんなのだろうか、と思わざるを得ない。「社会人基礎力」や「就業力」という言葉で、我々はいったい何をイメージしているのだろうか?就職の厳しい時代に正規雇用の就職内定を勝ち取るための「適応力」をつけさせるといイメージにとらわれているのではないだろうか?しかし、すでに見たように、正規雇用で就職内定を勝ち取ること自体が、大学新卒者全員に約束されてはいない。2010年度の学校基本調査によれば、そうした進路を勝ち得られるのは、60%少々で、不明ないしは非正規、一時的就労等という進路が22%近くを占める。企業への「適応」を説いても、すべての学生を救うことは叶わない。

学 校教育における「キャリア教育」はいかにあるべきかを考えると、本多由紀氏の著作『教育の職業的意義』は大いに参考になると思う。氏は、仕事の世界へ入る準備には、「働く者すべてが身につけておくべき、労働に関する基本的な知識」と、「個々の職業分野に即した知識やスキル」が欠かせないという。前者は、働く側が法律や交渉などを通じて〈抵抗〉するための手段であり、後者は仕事の世界からの要請に〈適応〉するための手段である。この区別からすると、文科省の推奨する「キャリア教育」も各学校が実際に行っている「キャリア教育」も〈適応〉の論理に傾きすぎてはいないだろうか?〈抵抗〉という物騒に響くかも知れないので、労働者としてせめて「身を守る」すべて言っておいたほうが良いかも知れない。

学生一人一人が、自分の人生の全体を設計するという意味での「キャリア」形成をまず考えるということが出発点にあるべきではないだろうか?大学に入っていきなり、就活に勝ち抜くための気構えや、資格取得、対人コミュニケーション等々の企業サイドからのニーズにこたえる教育を施すことが、「キャリア教育」では絶対にはいたはずだ。実業の世界には疎いといわれる我々教員は、「キャリア教育」では、自分の出番はないなどと思っはいてはいけない。人として生きるということは、如何にあるべきかを、学生に寄り添い、学生と共に考える存在でなければならぬのではないだろうか?

共通科目ラーニング・アウトカムズの現状と今後の展開

副機構長 西浦昭雄

2011年度後期において学士課程教育機構では、共通科目ラーニング・アウトカムズのパイロット授業におけるアセスメントの実施と次年度シラバスへの該当ラーニング・アウトカムズとの関連性の明記を入力する作業を推進してきました。新たに7つのパイロット授業でアセスメントが行われたことにより、2011年度を通じて11の科目群全てでアセスメントを実施することができました。パイロット授業の実施報告書のコメントでは、「到達目標・そのための取り組み・評価法を明確にし、公開することは、学生の学習意欲を高めるためにも重要である」と捉えられていました。一方で、「測定が難しいと思われるものをどう評価するのか要検討である」との指摘もありました。

また、次年度の共通科目のシラバスを入力する際に、ラーニング・アウトカムズの8項目の中で、その授業で該当すると思われる項目を最大3項目までチェックするという作業が共通科目の全講義によって行われました。これによりシラバスを参照する学生が、当該科目がどのラーニング・アウトカムズに関連しているかを認識することが可能になります。

こうした学士課程教育機構における共通科目のラーニング・アウトカムズの取り組みを学内外に紹介し、改善していこうとの趣旨から、2011年12月10日に全学FD委員会の主催で開催された「第9回創価大学FDフォーラム」で、「共通科目におけるラーニング・アウトカムズ (LOs) の設定とその評価の試み：取組報告」と題して報告しました。さらに、本学の「平成23年度全学自己点検・

評価委員会報告書」において、「共通科目ラーニング・アウトカムズにもとづく試験の評価」として、取組内容が採録されました(本学ホームページで公開中)。

これまでの共通科目ラーニング・アウトカムズの策定への一連の流れと今後の展望をまとめたものが図1です。2012年度には、共通科目各授業の到達目標を明確化するとともに、11の科目群から各セメスター1~2授業をパイロット授業として選定し、シラバスで掲げた「授業の到達目標」の到達度測定を実施していきます。さらに2013年度からは全共通科目への拡大も想定しており、その実施期間と対象授業範囲が今後検討されていきます。また、学士課程教育機構としては2012年度よりシラバスに入力されたラーニング・アウトカムズの情報をもとに、共通科目の「カリキュラム・マップ」作りに着手する予定です。

さらに、ラーニング・アウトカムズ策定の目的であるカリキュラムの改善と授業の改善を果たすために、PDCAサイクルに即しながら「内部質保証システム」を確立することを目指しています(図2)。カリキュラム・マップに基づき、共通科目が提供する授業群がラーニング・アウトカムズ達成のために十分な構成かどうかを検証するとともに、必要ならばカリキュラム改訂に着手していきます。また、共通科目授業の学習を通し、求められる学習成果を学生が修得したかアセスメントすることにより、授業内容、成績評価手法、授業到達目標の改善に取り組み、学士課程教育の質を担保していきたいと考えています。

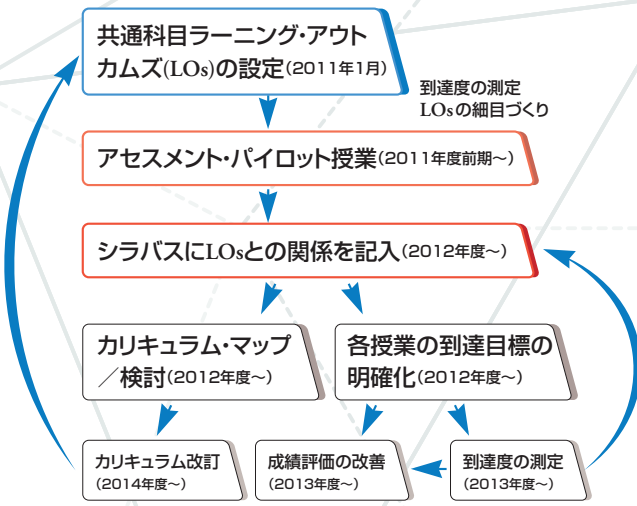


図1 創価大学共通科目ラーニング・アウトカムズ設定の流れ

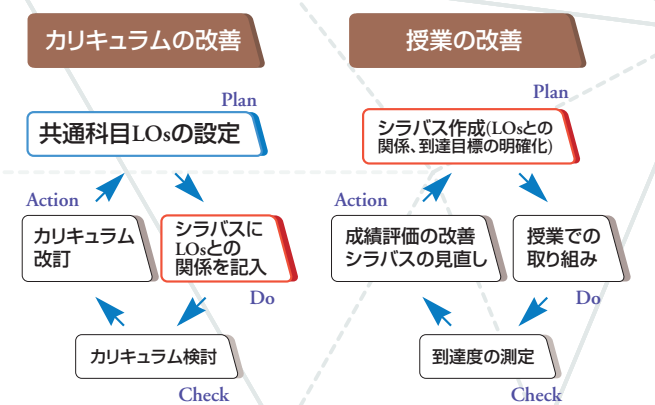


図2 創価大学共通科目の内部質保証システム

グローバル・シティズンシップ・プログラムと 学生の能力向上評価

学士課程教育機構 准教授 佐々木 諭

2010年4月に開始したグローバル・シティズンシップ・プログラム(以下GCP)は、本年4月に3年目を迎え、あらたに3期生34名が選抜されました。1期生は、昨年度に2年間の集中的なGCP授業を終了し、GCPで身につけたアカデミック・スキルや英語力を駆使して、それぞれのキャリア目標を果たすために挑戦を続けています。

GCPでは、プログラム開始当初より、学生の進路の確定とそれに関連する「教育の質保証」をプログラム評価指標に定め、プログラム評価方法をデザインしてきました。学生の進路については、1期生が卒業するまで数年待つ必要がありますが、「教育の質保証」については、プログラムが提供する授業の履修による学生の能力とスキルの向上を評価しています。今回は、評価指標のなかから「英語力」と「アカデミック・スキル」について紹介します。「英語力」は英語試験による数量的評価を採用し、「アカデミック・スキル」は、学生による自己アセスメントを用い、多様な評価指標に基づき達成度を測定しています。

「英語力」に関しては、週4回の英語授業により、リサーチ、ライティング、プレゼンテーション力の向上と欧米大学院進学に必要な英語基礎力を修得することを目指し、数値指標としてTOEFL、TOEICスコアを用いています。TOEICスコアの入学時平均点と2年間のベストスコアの平均点とを比較すると、入学時平均577.2点が828.4点に上昇し、2年間の間に250点を超える大幅な英語力の向上となりました。また、個人の英語力についても、それぞれの点数の散布図より学生の英語力が底上げされかつ上位にシフトしていることがわかります(図1)。2年間で28名(88%)のGCP生がTOEFL-ITP550点またはTOEIC800点を超える点数を取得し、TOEFL-ITP600点に相当する点数(TOEIC920点等)を超えた学生は8人(25%)に上りました。

「アカデミック・スキル」については、GCPは、入学時のGCP開始時、1年終了時、2年終了時のそれぞれの時期に学生アン

ケートを行い、プログラムの到達目標に関する学生による自己アセスメントを試みています。GCPは2年次終了までに提供する「プログラムゼミ」と「社会システム・ソリューション」の授業を通し、リーダーシップ力、論理的分析力、発想力、問題解決力、文章力、数理処理能力の向上を目指しており、それらの能力・スキルの修得度を測るために、学生による4段階の自己アセスメントを実施しています。

プログラム開始時と2年終了時の学生の自己評価を比較すると、いずれの能力・スキルにおいても向上していることが明らかとなりました(図2)。特に、「プログラムゼミII～IV」ではPBLの授業法を導入しており、課題テーマを設定した問題分析ならびに問題解決の取り組みが、論理的分析力、問題解決力、発想力の向上に寄与していると考えられます。また、対象のGCP1期生の7割が文系学部所属しているため、入学時の自己評価によれば、数理力は「身につけていない」が大半を占めていましたが、「社会システム・ソリューション」の授業が数理力の向上につながったと推察されます。これらの能力の修得は、創価大学の共通科目、専門科目授業の履修が寄与していることももちろん考えられますが、いずれの指標もGCPの授業到達目標に定められた能力・スキルであり、授業内容もこれらの力を高めるために緻密にデザインされている点から、GCP授業による効果も大きいと言えるでしょう。

プログラムの成果は、寸暇を惜しんで勉学に徹する学生の努力が何よりも大きいですが、学生の学びを促す授業方法や授業課題、教職員による献身的なサポート、学生同士の励まし合いなどが相乗的に効果を引き出しているとも考察できます。これらの努力と成果が、学生の目指すべき進路達成の結果となってあらわれるよう引き続きプログラムの発展に尽力していきたいと考えています。

図1 TOEIC点数推移

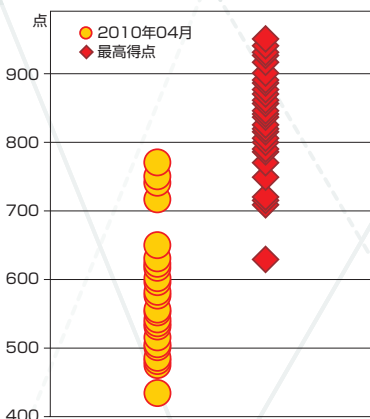
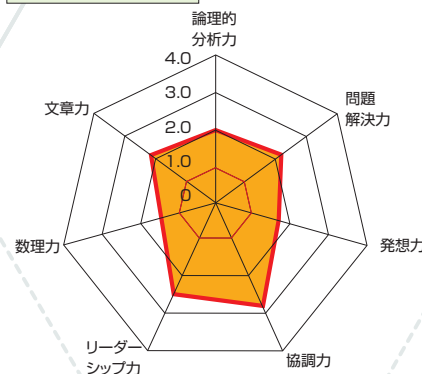


図2 プログラム到達目標に関する学生アンケート

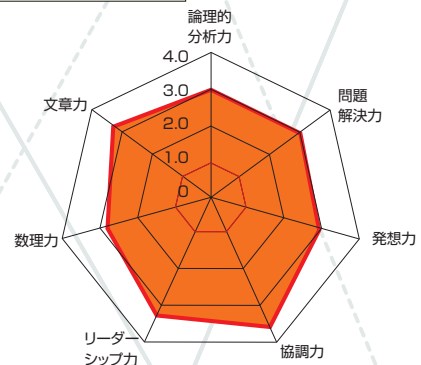
a. プログラム開始時 (2010年4月)

b. 2年終了時 (2012年2月)

- 4. 身につけている
- 3. やや身につけている
- 2. ほとんど身につけてない
- 1. 全く身につけてない



- 4. 身につけている
- 3. やや身につけている
- 2. ほとんど身につけてない
- 1. 全く身につけてない



2011年度後期 CETL学習支援の状況

2011年度後期に、CETLは以下の活動を行いました。

■学習セミナー

2011年度後期、「文章力アップ講座」、「文献読解スキル講座」、「対人関係力アップ講座」、「自己管理能力アップ講座」、図書館と連携しての「図書館活用力アップ講座」、「マインドマップ講座」の6講座25タイトルの学習スキルセミナーを計85回開講し、のべ258名の学生が参加・学習しました。

前期からの変更点としては、(1) マインドマップ講座を新規開講したこと、(2) 数学力アップ講座をチューター制に変更したこと、(3) 対人関係力アップ講座および自己管理能力アップ講座を半期の間に3回行ったことなどが挙げられます。また、セミナーの内容がわかりやすいように、いくつかのセミナーの名称も変更しました(ex. 「ディスカッションで文献を理解する」→「読解力を鍛えよう」)。さらに、学習スキルセミナーのパンフレットを大幅に改訂し、見やすくしました。そして、パンフレットを1・2年生の学部ガイダンス時に配布しました。それらの結果、前期と比べ、受講者が増加しました(前期利用者は123名)。また、拡充された「対人関係力アップ講座」に参加した学生(79名)の100.0%が「参加

の目的を達成した」と回答しています。

■「初年次・導入教育を支える学習支援体制整備」の取り組み

2009年から始まった大学教育推進プログラム「初年次・導入教育を支える学習支援体制整備」の取り組みが最終年度を迎え、カリキュラム連携型学習スキル訓練(ASTAC)や学業不振学生への特別な支援プログラム(オアシス・プログラム)が精力的に行われました。ASTACでは5つの授業(15コマ)と連携し、294名の学生がレポート診断を利用しました。また、後期にオアシス・プログラムを利用した学生は6名でした。

■CETL学習相談

後期にCETLの学習相談を利用した学生は82名で、前期と合わせると359名になります。相談内容としては、後期においても履修相談がもっとも多く、その他の内容としては「英語の勉強方法」、「数学の復習の仕方」、「留学について」、「進学・就職など卒業後の進路について」などがありました。

学士課程教育機構FDセミナーを開催

2011年度「学士課程教育機構FDセミナー」は7回開催されました(本学FD委員会後援)。第4回から第7回までの内容は以下の通りです(第1回～第3回は『SEED』第2号に掲載しております。また、第5回はWLCが企画・運営しました)。

実施日	テーマ	講師	
第4回	2011.9.28	レポート評価のためのルーブリック	山崎 めぐみ 准教授 (SEED)
第5回	2011.11.2	学習者の自律 ―その理論と応用―	勘坂 泉 講師 (WLC) ダレル・ウィルキンソン 講師 (WLC) レイモンド・ヤスタ 講師 (WLC)
第6回	2011.11.16	全国50大学100人のベストティーチャーの授業参観から見えてきたもの	遠山 紘司 教授 (神奈川工科大学)
第7回	2012.1.20	ICT活用教育の実践	望月 雅光 准教授 (CETL副センター長) 福田 伸枝 助教 (CETL) 鈴木 夕佳 助教 (CETL)

遠山紘司教授のFDセミナー

2011年11月16日(水)、遠山紘司教授(神奈川工科大学教育開発センター)をお招きし、「全国50大学100人のベストティーチャーの授業参観から見えてきたもの―学生にとって良い授業とは―」のテーマで、FDセミナーを開催しました。

遠山先生は、神奈川工科大学の教育開発センター長に就任された当初、「学生の目を輝かせる授業とはどのようなものなのか」という疑問をもち、その答えを求めて現在、全国50の大学を調査されています。そして、各大学の学長や学科長、また学生が選んだ100人の「ベストティーチャー」の授業を実際に参観し、撮影されています。



参加者の声 セミナーに参加して CETL助教 福田伸枝

今回のセミナーでは、遠山先生が撮影された実際の授業風景を見ながら、調査から得られた知見についてお話いただきました。

そのなかで、遠山先生は、学生の名前を呼ぶなどの信頼関係を築きながら行われている授業や学生のレベルに合わせて教材を選んでいる授業について、また、ベストティーチャーと呼ばれる教員のいくつかの共通点などについて言及されました。ビデオでは、学生が私語や居眠りをしていないどころか、むしろそれ以上に、参加意欲を大いに持って授業に臨んでいる姿勢を強く感じました。

最後に、遠山先生は、「他人の授業を見るだけではなく、自分の授業を見てみることも大切です」とおっしゃっていました。私も、学内の先生方の授業を積極的に見学し、自分の授業を振り返りながら、学生の目を輝かせる授業ができるように精進していきたいと思います。

本学ではこれまで教育の質向上のために、授業外学習時間の増加、シラバスの充実、そしてラーニング・アウトカムズの設定など、様々な改善に取り組んできた。そうした取組みの浸透度・認知度を把握するために、CETLでは本年1月に本学専任教員を対象に「教育の質向上に関する教員アンケート」を行った。以下、(a)ラーニング・アウトカムズ、(b)授業アンケートの活用、(c)シラバスの充実、(d)CETLの諸活動の4項目に関して集計結果の要約を報告する。

ここで、アンケートにご協力いただいた皆様に、改めて御礼申し上げます。

◀調査概要▶

時期：2012年1月10日～2月3日

対象者：創価大学専任教員290名（外国人教員含む）(悉皆調査)

方法：インターネットによる調査票調査

回収率：48.3%（学部ごと：経済学部72.7%、法学部42.9%、文学部50.8%、経営学部61.1%、教育学部54.5%、工学部49.2%、学部以外38.4%）

なお、回答者の教歴は、3年未満19.3%、3年以上10年未満20.7%、10年以上20年未満21.4%、20年以上38.6%となっている。

1.ラーニング・アウトカムズ

現在、学部ではラーニング・アウトカムズの設定に向けて動いている。学部にも所属する教員（107名）に本取組みについて聞いたところ、83.2%（89名）が「知っている」と回答した（「知らない」16.8%）。また、導入についてたずねたところ、「積極的に進めるべきだ」22.5%（24名）、「進めるべきだ」40.2%（43名）、「よくわからない」33.6%（36名）、「できればやめるべきだ」2.8%（3名）、その他0.9%（1名）となった。6割を超える教員が前向きである一方、3人に一人は「よくわからない」と回答している。また、「進めるべきだ」と回答した教員の自由記述にも、「科目内容とラーニング・アウトカムズとの関連付けを明確化することは難しい」、「達成された度合いをどのように客観的に評価するのか？」などの疑問が散見された。学部レベルでのもう一重の理解促進が望まれる。

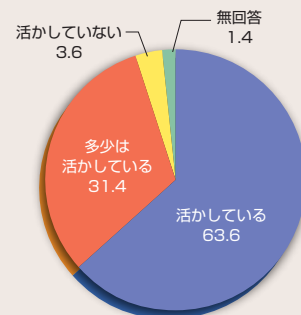
他方、共通科目では、学部にも先行する形でラーニング・アウトカムズをパイロット的に導入してきた。実際、昨年度までに8つのラーニング・アウトカムズを設定し、本年度より、共通科目の全講義（非常勤講師含む）において、シラバスを入力する際に、該当項目をチェックするという作業が始まった（最大3項目まで）。

本調査では、本学の専任教員（共通科目を担当していない教員含む）がそれらの取組みについて知っているかどうかを確認した。アウトカムズ設定については、67.9%（95名）の教員が「知っている」と回答し（「知らない」32.1%）、また65.7%（92名）が「シラバス入力時における関連付けが始まったことを知っている」と回答している（「知らない」34.3%）。

2.授業アンケートの活用

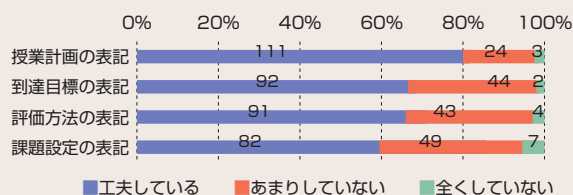
授業アンケートの結果を授業改善や授業設計に活かしているかどうかを聞いたところ、「活かしている」あるいは「多少は活かしている」と回答した教員は95.0%（133人）で、非常に多くの教員が活かしていることが確認された。他方、「活かしていない」と回答した教員は3.6%

（5人）と少数であったが（無回答2名）、その理由を確認しておくことは重要に思われる。実際、「アンケートの信頼性が低いから（3人：教歴3年未満、3～10年、20年以上から各1名）」、「現在の内容を変えるつもりがない（1人：教歴20年以上の教員）」、「現在の質問項目では役に立たないから（1人：教歴3年以上10年未満の教員）」、「改善の努力にも関わらず、評価が上がらなかったから（1人：教歴3年以上10年未満の教員）」などがその理由として挙げられていた。



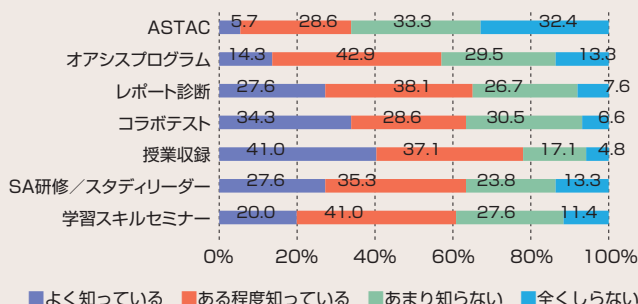
3.シラバスの充実

「現在、全学の取組みとして、シラバスの充実が図られているのを知っていますか」と尋ねたところ、「よく知っている」89.3%（125名）、「あまり知らない」8.6%（12名）、「全く知らない」0.7%（1名）であった。他方、シラバス作成時の工夫について項目ごとに尋ねたところ、「工夫している」項目として多かったものは、順に、「授業計画」80.4%（111人）、「到達目標」66.7%（92人）、「評価方法」65.9%（91人）、「課題設定」59.4%（82人）であった。



4.CETLの諸活動

最後に、CETLの諸活動の認知度について聞いたところ、学部教員（107名）で「よく知っている」あるいは「ある程度知っている」との回答は、「ASTAC」34.3%、「オアシスプログラム」57.2%、「レポート診断」65.7%、「コラボテスト」62.9%、「授業収録」78.1%、「SA研修/スタディリーダー講座」62.9%、「学習スキルセミナー」61.0%となっている。CETLの新しい学習支援プログラム（ASTACやオアシス・プログラム）に関しては、まだまだ認知度が低いことが確認された。



まとめ

本調査では、本学のこれまでのFD活動によってシラバスの充実や授業アンケートの活用などにおいて教員の高い意識が確認された。

本年3月26日、中央教育審議会大学分科会大学教育部会が発表した「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」には、「授業のための事前準備

や事後展開などの主体的に学ぶ時間を含めた十分な総学修時間の確保」が強調されている。シラバス上での予習・復習の指示や課外の学習支援サービスの活用など、授業外学習時間増進に向けた取組みは、今後ますます重要になる。CETLでは、教員とのさらなる連携を密にして、FDならびに学習支援に一層の力を入れていきたい。

GP最終年度・取組み報告

本学の学習支援の取組み「初年次・導入教育を支える学習支援体制整備」が、文部科学省の平成21年度大学教育推進プログラムに採択されてから、3年が経ちました。

平成23年度が取組み最終年度に当たったため、本年2月から3月にかけて内部・外部評価委員会、さらにGP取組み最終報告会が行われました。

■内部・外部評価委員会

2月8日（水）、内部評価委員会が行われました。そこでは、山本学長、馬場副学長、寺西副学長・機構長の他、CETLの学習スキル育成部門員が参加し、現状と成果の確認が行われました。

その内容を踏まえ、2月28日（火）には、関西国際大学の上村和美教授、慶應義塾大学大学院の伊藤健二准教授、南大阪地域大学コンソーシアムの難波美都里統括コーディネーターを外部評価委員としてお招きし、外部評価委員会を開催しました。そこでは、関田一彦CETLセンター長より取組みについて報告があり、その後、3名の外部評価委員による質疑応答が行われました。

外部評価委員の方々からは、創価大学の様々な連携や仕組みがうまくできている点や対象を明確にしている点を高く評価いただきました。また、IRの利用による総合化の可能性や学生目線でのスキル等の立体化の必要性などについてご指摘をいただきました。さらに、学生同士の学び合いの活性化などについて今後も情報交換をしていきたいとの提案もありました。

**■GP取組最終報告会**

3月24日（土）、GP取組み最終報告会「学習スキル養成を柱とする複合的学習支援の試み」を開催し、学外より大学・教育関係者65名、本学教職員26名、学生15名の総勢106名が参加しました。

寺西機構長の挨拶の後、午前の部ではマインドマップ・ワークショップを行いました。午後の部ではCETLセンター長の関田一彦教授がGP取組み最終報告として、「学習スキル養成を柱とする複合的学習支援の試み」について報告を行いました。

その後、協同学習の世界的トレーナーであるスペンサー・ケガン博士が「ケガンストラクチャによる学生の参加を促す授業法」のテーマで、体験型の記念講演を行いました。

参加者からは、「（本取組みは）スキルを学習内容と態度の両面で把握しサポートするアプローチが良い。学びを『ピアを通じての学び合い』と捉えた点、そのためのケガン博士のレクチャー。この流れも見事です（学外教員）」。「基礎ゼミとCETLの連携の重要性を感じました。素晴らしい学生支援だと思います。学生が自ら受講するよう活用度が高まるよう大いに期待します（学外教員）」など多数の声が寄せられました。



寺西宏友機構長



Dr.ケガン

■成果報告書

本取組みをとりまとめ、「成果報告書」を作成・発行しました。本報告書は、CETLのホームページからもご覧いただけます（http://cetl.soka.ac.jp/gp_report.html）。また、CD版の報告書を全国の大学に配付しています。

また報告会に合わせて、教員向けのCETLガイドブック『CETLの使い方』と『マインドマップ事例集』を発行・配布いたしました。

2012年度前期 CETLの活動

2012年度前期に、CETLは以下の活動を行います。

■学習セミナー

2012年度前期は、自己管理能力・対人関係力・マインドマップ・文章力・文献読解力・図書館活用力・数学力の7つの分野に関する33セミナーを開講します。

新たな取り組みとして、新入生を対象とした学生生活全体をサポートするセミナーを行いました。さらに、「文章力アップ講座」では、昨年度まで行っていた「レポートの書き方」に加え、「プレゼンテーションの仕方」を学ぶセミナーも新規開講します。

参加登録方法については、CETLホームページや携帯電話から登録が可能です。ただし、数学力アップ講座はチューター制のため、CETL窓口(A206)で直接予約をしていただきます。各セミナーの詳細や日程については、学習セミナーのスケジュールのパンフレットを作成しています。

■CETL窓口(A206)

CETL窓口(A206)では、学習方法やレポートの書き方、タイムマネジメントの仕方など、学習に関係する悩みを持つ学生に対して、大学院生スタッフによる「学習相談」を行っています。ここでは、悩みに対して「答えを与える」のではなく、学生自身が「自分の中にある答えに気づき」、解決・成長していけるよう、サポートをしています。また、実際に書いたレポートに対して、形式や文章表現についてのフィードバックを行う、「レポート診断」も行っています。学習相談は授業実施日の平日15:30~18:30まで、レポート診断は12:30~18:30まで受け付けています。

■ASTAC (Academic Skills Training Across the Curriculum) : 科目連携型学習スキル訓練

ASTACは、学習スキル育成を意識した授業を行っている教員とCETLが連携して行う試みです。ここでは、学生にCETLで提供している学習セミナーやレポート診断を課外授業として利用させ、実践を通じた学習スキルの強化・増進を目指しています。

2012年度前期の新しい取り組みとしては、共通基礎科目「人間教育と創価大学」と連携し、受講者約800名の課題レポートを診断し、学生のレポート作成に必要なスキルを養成します。

また、基礎ゼミなどと連携し、教員が学生に学習セミナーを紹介しやすいように学習セミナーのパンフレットを配布しました。

■オアシス・プログラム

オアシス・プログラムは、CETLが学部アドバイザーと協働で行う個別学習指導です。GPAが卒業要件(2.0)に満たない学生を対象として、学部アドバイザーからの推薦状と学生本人が書いたエントリーシートをもとに、学習スキルの個別指導、コーチング・セッションを設け、学生の学習意欲と自己管理能力の向上を目指します。

プログラムの参加はいつからでも行えますが、2012年4月の現時点では、3名の学生が、2011年度後期から継続してこのプログラムに参加しています。

■ICT (Information and Communication Technology) 活用教育

WEB上で、学生が授業で学んだ内容に基づいて問題を作成し、それをグループで改善する演習を行うコラボテストと呼ぶシステムを運用しています。このシステムを使うと学生間で協力的に学習を進められます。また、学生と教員とのやり取りを増やすことができます。コラボテストについては、CETL窓口(A206)内にヘルプデスクを設置しています。

さらにCETLでは、最新の教育用機材を調査し、教育現場での活用法を提案しています。また、学内の要望に応じて、eラーニング教材の開発を行っています。

■教育サロン・ブラウンバッグ

2012年度前期の教育サロン・ブラウンバッグ(お昼休みにVODによる講義視聴)は、5月23日~7月19日の水曜日と木曜日を予定しております。

以上が2012年度前期の活動予定です。CETLのご利用などの詳細に関しては、電話またはメールにてお問い合わせいただくか、ホームページまたは、教員用ガイドブック「CETLの使い方」をご覧ください。

CETL 電話番号: 042-691-9782 / 内線2146
ホームページ: <http://cetl.soka.ac.jp/>
E-mail: cetl@soka.ac.jp

※学士課程教育機構主催「2012年度FDセミナー」については、本ニュースレターの最終ページをご覧ください。

各種パンフレット等を作成・改訂

2012年春、CETLでは、教員用ガイドブック「CETLの使い方」(写真左)、「学生向けCETLパンフレット(改訂版)」、「マインドマップ事例集」(写真中央)、そして、「2012年度前期CETL学習セミナースケジュール」(写真右)を作成しました。

今後も、本学の教育支援および学習支援に積極的に取り組んで参ります。



玉川大学学士課程教育センターシンポジウムに参加して

WLC助手 石川由紀子

2月23日（木）、玉川大学学士課程教育センター主催シンポジウムに参加させて頂きました。「英語で学び、考える」学士課程教育の課題」というテーマのもと、各大学の取組みが紹介されました。

基調講演では、中嶋嶺雄学長が国際教養大学の画期的なカリキュラムを紹介。入学時のTOEFLスコアでクラス分けした英語集中プログラム（EAP: English for Academic Purposes）で徹底的に英語力と学習スキルを訓練し、全て英語で開講される基盤教育と専門教養教育で、留学するのと変わらない環境を作る取組みなどをお話しされました。ほかにも立教大学国際経営学部での英語教育と専門教育を融合するカリキュラム作り、立命館アジア太平洋大学での二言語教育の挑戦、玉川大学のEFL（English as a Functional Language）プログラムの導入などの興味深い内容が発表されました。

なかでもとりわけ印象的だったのは、パネルディスカッションでの「いかに学習環境を提供するか」という議論で

す。ひとつはスペース、ゾーンなどハード面での環境の整備、ひとつはカリキュラムのデザインなどソフト面での環境整備、そしてもうひとつは“学んだ英語を使える＝役に立つ”と実感できる自律的学習の場を提供する工夫について意見が交わされました。各大学で、留学生との交流や、TA制度を活用した先輩が後輩のモデルとなる仕組み作り、外部講師の講演会など、学生を主人公にして学習のモチベーションを保てるような工夫がされています。

本学ワールドランゲージセンターでも、セルフアクセスセンターなどハード面の整備、Only Englishの「英語で学べる」カリキュラムのソフト面の整備はある程度進んできています。これまでも学生スタッフによる会話プログラムの運営やイベントの開催など実施してきましたが、さらに学生のモチベーションアップを支援する自律学習の工夫を企画していきたいと思います。「英語で学べる」環境を整えたその先に、さらにこれからどのような新しい発展を遂げていけるか、と考える大変刺激的な機会となりました。

2012年度前期のおもな活動

▶学生向けイベント◀

5月9日 講演会：Global Lecture Series 1「国際社会で活躍できるリーダーの資質とは？」

講師：鈴木俊介氏

（特定非営利活動法人AMDA社会開発機構理事長）

5月11日 英語学習法ワークショップ

6月6日 講演会：Global Lecture Series 2「夢に向かって生きる力」

講師：高橋朋子氏（アメリカ創価大学副学長）

6月15日 Chit Chat Club シネマデー

▶学生向けプログラム◀

4月末～7月末 語学ポートフォリオコンペティション

5月7日～ iBTスピーキングプログラム

7月31日～8月7日 夏期 TOEFL/TOEIC 集中講座（仮）

▶プロジェクト（WLCスピーキングアセスメント）◀

4月4日 教員FDセッション「Inter-Rater Reliability in Standardized Speaking Tests」

4月16日～20日 スピーキングアセスメント（第1次）（スピーキング力を測定するためのインタビュー）

7月中旬 スピーキングアセスメント（第2次）（スピーキング力の向上を測定するためのインタビュー）

▶日本メディア英語学会一行をお迎えしました◀

6月4日（月）、日本メディア英語学会の一行をお迎えし、ワールドランゲージセンターのSelf-Access Programツアーを行いました。ツアーでは、英会話練習施設やライブラリー、英語学習相談室など学内の語学自主学习施設をご案内し、本学の自律学習支援の取組みをご紹介します。

WLCエッセイ・コンテスト

マルコム・ダガティ

2010年に創価大学ワールド・ランゲージ・センター(WLC)では、開設10周年を記念して第1回目のエッセイ・コンテストを実施した。このコンテストのねらいは、学生の英語によるライティング技術を、授業の枠外で発揮してもらう場を提供しようというものであった。第1回目の成功により、WLCではこれを毎年定期的に開催することを決定した。毎回のテーマはWLCのミッション・ステートメントにうたわれた世界市民性の要素と関係したものになっている。その要素とは、生きとし生けるものすべてが互いに関係しあっていることを覚知できる知恵であり、差異を怖れたり否定したりするのではなく、異文化の人々を尊重し理解しようと努力し、彼らと向き合うことで自ら成長しようと

する勇気であり、自らの卑近な環境を越えてかけ離れた土地で苦しんでいる人々に思いをはせることのできる共感力である。

このコンテストは創価大学に在学するすべての学生に開かれている。2つの部門に分かれており各部門の上位3名には図書券の賞品が贈られる。応募エッセイは1200から1500語のあいだの分量で、他者の手助けを借りずに書かれたものでなければならない。第3回WLCエッセイ・コンテストの入賞エッセイをご覧になりたい方は以下のサイトへ。

http://wlc.soka.ac.jp/index/en/columns_and_essays/wlc_essay_contest-2011.html



WLCエッセイコンテスト2011に参加した皆さん
(WLCパーティーでの授賞式にて)

WLC FDワークショップ

ダレル・ウィルキンソン

WLCでは毎年FDワークショップを開催し、全学の教職員向けに教育実践や研究成果を発表している。2011年度は「学習者の自律—その理論と応用」と題し、勘坂泉講師、ダレル・ウィルキンソン講師、レイモンド・ヤスタ講師の共同発表を行った。

まず冒頭に、自律学習を促す教育について、理論的背景の説明があり、勘坂泉講師が、日本の大学という文脈の中で自律した学習者を育む準備段階として、反応性自律 (reactive autonomy) という概念を紹介。“学習ストラテジーの徒弟制” (the apprenticeship of learner strategies) という理論モデルを提唱した。この徒弟制では、教師は自律学習を促進する重要なファシリテーターの役割を担い、認知的徒弟制やモデリングを通して具体的な学習ストラテジーを提示したり、対話を通してメタ認知的知識を共有したり、メタ認知的気づきを促すための批判的内省の機会を提供したりする。この手法を成功させるためには、教師が持っている言語学習に対するビリーフ (信念)、またそのビリーフがどのように発展しているかを、教師自身が常に批判的に内省することが重要であるとともに、教師が学習者の自律する力を信じ、学習者を自律させたいと心から願っているということが不可欠である。

次にレイモンド・ヤスタ講師が、

この学習者の自律を育む取組がどのように実践されているかを、インターナショナルプログラム (IP) のミクロ経済学とマクロ経済学のコンテンツベースの授業を例に発表した。スタディスキル、タイムマネジメントやライティング、リサーチ、編集スキルなどの、リサーチペーパーを書くための土台作りとなるスキルを紹介。これらのスキルは一つ一つが科目の目標を到達できるように組み立てられているだけでなく、学生がこれから学問や仕事をする上で有益となり、長期的に自律した学習者となることを目標に、設計されている。

次にダレル・ウィルキンソン講師が、IPのGlobal Economy Labという授業を例に、履修者がどのように自律性を育んでいるかを紹介した。この経済学のクラスは英語で行われ、学生は授業の内容についてテストを作成する。この過程を通し、経済学の内容を学んでいくのと同時に、将来自律した学習者として必要なスタディスキル、読み書き、文法、編集、自己管理のスキルなどを身につけていく。

最後に、参加者同士で意見交換が行われ、どのように自身の授業で自律を育む努力をしているか、また、今後どのような形で授業に自律を促すスキルを取り入れていくことができるかなどについて議論された。



FDワークショップの様子

※原稿は英語で編集部へ届けられたものを日本語訳しました。

創価大学「第9回FDフォーラム」を盛大に開催

2011年12月10日、創価大学「第9回FDフォーラム」(本学FD委員会主催)が、「教育の質を高めるカリキュラム改善—ラーニング・アウトカムズの設定とその評価—」をテーマに、本学S201教室にて開催されました。学外からも多くの大学関係者が参加し、また、本学の学生(30名)を含めると総勢200名を超える方々が参加しました。

第1部では、立命館大学教育開発推進機構・機構長補佐の沖裕貴教授を講師に迎え「Diploma Policyに基づく体系的な教育改善について」と題した基調講演が行われました。大学教育目標を反映したディプロマポリシーの重要性と、その達成度検証の一環としてラーニング・アウトカムズの設定・測定について論及され、カリキュラム改革とその評価を分析された内容に、参加者は熱心に耳を傾け、活発な質疑応答が交わされました(詳細は本機構発行の紀要に記載)。

第2部では本学学士課程教育機構・副機構長の西浦昭雄教授が「共通科目におけるラーニング・アウトカムズの設定とその評価の試み」について報告を行い、本学の学士課程教育機構・共通科目運営センターが施行しているラーニング・アウトカムズの設定と評価について、既に実施した19の「アセスメント・パイロット授業」結果などを紹介しました。



沖 裕貴教授 (立命館大学)



西浦昭雄副機構長

参加者からは「ディプロマポリシーを始めとする教育改善に関する具体例を示して頂き、大変勉強になりました。また創価大学における具体的なラーニング・アウトカムズの試みを知ることができ、教育の向かうべき方向を示唆して頂きました(本学教員)」

「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善は、個々の教員の努力に任されている大学が多い中で、組織的な取り組みとなっていることが驚きでした。カリキュラムマップ、ルーブリックの作成手順と方法は参考になりました(学外教員)」などの声が寄せられました。

Info

2012年度学士課程教育機構FDセミナーのお知らせ

日時	講師	講演内容	外部公開
第1回 4月27日(金)16:45~	大塚雄作 (京都大学)	大学評価とFDの課題 —学生の学びの実質化に向けて—	有
第2回 5月11日(金)16:45~	中川正明 (京都産業大学)	京都産業大学におけるキャリア形成支援教育(日本型コーオプ教育)の展開から就職支援へ	有
第3回 6月27日(水)16:45~	山崎めぐみ (SEED)	学習者中心の授業設計	有
第4回 7月14日(土)13:30~	関田一彦 (CETL)	グループ学習の改善	有
第5回 9月21日(金)16:45~	山田和人 (同志社大学)	PBLで伸ばす学力と就業力	有
第6回 10月26日(金)16:45~	松本美奈 (読売新聞社)	大学の教育力を考える	有
第7回 11月14日(水)16:45~	リッチモンド・ストゥループ (WLC) 福田衣里 (WLC)	Teacher Collaboration	無
第8回 1月25日(金)16:45~	田村友一 (明星大学)	学生相談室から見た学生対応—明星大学の事例から学ぶ	有

- * 第1回目および第2回目は既に終了しております。
- * 参加ご希望の方は、ホームページ (http://fd.soka.ac.jp/gakushi_fd2012.html) よりお申込み下さい。
- * 学外の大学関係者の方のご参加も可能です。上記HPよりお申込み下さい。
- * 定員があるプログラムについては先着順となります。ご了承下さい。

■ 創価大学「第10回FDフォーラム」は12月15日(土)を予定しております。

▶ 学士課程教育機構 (SEED) の新任教職員紹介 ◀

- | | |
|-------------------------------------|-------------------|
| ■教員 五味 千帆 准教授 (共通基礎演習、他 *看護学部設置準備室) | 齊藤 幸一 助教 (文章表現法a) |
| 山田 竜作 准教授 (政治学:国際政治入門、他) | 畑 由美子 助教 (文章表現法a) |
| 山下 由美子 講師 (文章表現法a, 文章表現法b) | |
| ■職員 斎藤 康夫 (SEED事務室) | |
| 山岸 啓一 (SEED事務室) | (順不同) |



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター[SEED] 第3号
発行日 2012年6月6日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://seed.soka.ac.jp/>